

劑技術だけでなく、現存医学古典の成立の事情についても問題を提供していることがわかったが、現状では『医心方』の方が『外台秘要』より、底本の良否は別として、原典の姿をより忠実に伝えていると考えてよいであろう。

有持桂里の墓碑銘および過去帳と

その漢方医学について

原 桃介

有持桂里（一七五八—一八三五）

有持常安、号は桂里また毓春園ともいう。名は希藻、字は文磯という。阿波の人で、十九歳の時京都に上り、医学を三角法眼に学び開業した。文化九年知恩法親王の侍医となり法橋に任ぜられた。天保六年（一八三五）享年七十八歳で没し、称名寺に葬られた。称名寺は現在、京都市中京区裏寺町通り蛸薬師下ルにある。

演者は称名寺の有持桂里の墓に参詣し、その墓銘を写したので、それを次に掲載する。墓銘の誤は、貫名包（ぬきなしげる）号は海屋で、江戸末期の儒者、書画家である。やはり阿波の国の人で同郷の誼で墓銘を撰述したものである。書は風韻の高い書風で幕末の三筆の一人といわれる。現在、多くの書家がこの墓銘の書を見学を訪れているそう

である。

法橋有持君墓誌

法橋阿波人、父名常元、姓紀氏、其先民部成良、蓋當文治建久時、其後有用道慶、為三好元長之女婿、其子徳次郎仕細川氏、而俱不詳其履歷及□、常元更姓有持君、名希藻、字文磯、稱常安、年十九、負笈京師、師三角法眼、三年而開業、請治者衆多、遂家釐下、文化九年、知恩法親王命為侍医、十年四月、任法橋位、是年閏月、應阿波聘療疾、病愈、賞以祿稍若干、天保六年正月十六日、病没、年七十八、葬京極裏街稱名寺、君始妻仁木氏、生男元瑞、嗣繼室鎌田氏、生男愿女二人、長適小倉氏、次適湯淺氏、君平日勤學勵業、著有方輿輓十五卷、行于世、已老志不衰、門人彌曰桂里先生、与余有同郷之誼、遺命属余銘、銘曰

溫柔接物容心折折精意研術方輿有輓

貫名苞譚

称名寺の過去帳には、天保六年 正月十六日の項に

積善院常譽有慶居士 世壽七十八歳有持常安

先箱 從士 侍 伴僧 後箱

遠見手替袋傘從士 輿四人 履取長柄

先箱 從士 侍 伴僧 後箱

笠籠 同押

合廿一人云々と葬式の様子が詳細にのべられていた。

有持桂里の著書に「方輿輓」「腹候要訳」「方輿」「脈候提綱」がある。「方輿輓」は、校正方輿輓のほか、最近伝写本である稿本方輿輓が出版された。方輿輓とは薬方を乗せる車の意味で、塾生の求めに応じて講義したものである。

内容は婦人方にはじまり、内科、小児科、外科、皮膚科にわたり、病類別に治法を詳述したもので、和文で読み易く随所に適切な考証を加えてあり、古方後世方の運用書としては群書中の白眉とされている。したがって、現代漢方臨床医家にも広く読まれた本である。方輿輓から引用された薬方、薬物、症候などについて次にのべる。

大塚敬節著「金匱要略講話」

候氏黒散 凝水石 猪苓散 当帰散 礬石丸

大塚敬節著「漢方治療の実際」

桂枝附子湯 甘草附子湯

大塚敬節・矢数道明・清水藤太郎著「漢方診療医典」

胆礬、枯礬による眼瞼縁時の洗眼

矢数道明著「漢方處方解説」

清熱補氣湯

矢数道明著「漢方治療百話」第1巻

心下痞

高橋道史著「漢方診療の実際」

げんぺき 半夏

大塚恭男「治療学」7巻5号

大黃の精神作用

矢数道明・西山英雄・石原明「漢方の臨床」9巻 7巻

延経期方

「明治前日本医学史」第4巻

急喉痺 喉癰 纏喉風（ジフテリア）流行の記載。

（同愛記念病院）

（墓銘の読点、返点は岡山泰四氏の御
教示による。ここに謝辞を呈します。）

武相の種痘——平塚宿の場合

深瀬泰且

一、はじめに

相州平塚宿は江戸から一五里半、東海道五三次の宿駅の一つである。東西約一八丁、南北約二三丁、南に相模湾をのぞみ、東は相模川、西は花水川を境として、おおむね平坦地で松林のおおい土地である。

順天堂大学山崎文庫には、この平塚宿での天然痘の罹患状況と、種痘の実施状況をしるした『種痘天然痘取調書上簿』が蔵されている。武相の種痘の一部として、昨年の総会ではジョージ・ニュートンの種痘事業について報告したが、今回はこれによって幕末から明治にかけての天然痘と種痘の状況について報告する。

二、『種痘天然痘取調書上簿』

扉には「嘉永四年辛亥ヨリ明治八年五月迄」と収載期間が明記されており、中央に書名、左下には「第二大区十小